

旧約単篇 創世記の福音

不思議な“契約”

創世記 15 : 1-21

「不思議な」と言いますのは、二つの意味です。一つはこの時の主の約束が、18節で、「主がアブラハムと契約を結んだ」と言われながら、アブラハムの側で満たすべき条件が全く規定されないまま、いわば一方的に主のお約束だけで成り立っているような「契約」だということです。タルソのパウロだけがこの契約の本質を見ていたと言え、言い過ぎかもしれません。でも彼は、「神は約束によって、ひとりで事を運ばれた」（ガラ 3 : 18, 20）という、独特の説明をしています。パウロは確かに、旧約の契約の解釈においては、天才的でした。

もう一つは、この契約が結ばれた時の、異様とも何とも表現のしようのない光景です。Derek Kidner は“somber”という形容詞を使っています。「薄暗い、黒ずんだ」という訳語が出ておりますが、恐怖と戦慄さえ覚えさせる、暗闇の中の異象です。

8. アブラムは尋ねた。

「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」

9. 主は言われた。

「三歳の雌牛と、三歳の雌山羊と、三歳の雄羊と、山鳩と、鳩の雛とをわたしのもとに持って来なさい。」

10. アブラムはそれらのものをみな持って来て、真っ二つに切り裂き、それぞれを互いに向かい合わせて置いた。ただ、鳥は切り裂かなかった。 11. 秃鷹がこれらの死体をねらって降りて来ると、アブラムは追い払った。

12. 日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろし

い大いなる暗黒が彼に臨んだ。

舞い降りる禿鷹（アブラハムへの敵意？）は、神との契約を結んだ民を生かしては置かない執念の敵を暗示する……というキドナーの言葉が適切か、それとも解釈過剰か。暗黒と煙りと火は、シナイの場面と同じく「聖なる生ける神の前に出る罪人」の畏れを象徴する……という所は誰も異論はないでしょう。真っ二つに裂いた雌牛と雌山羊と雄羊というのは、食肉市場の人なら驚かないでしょうが、我々日本人には、想像するだけでショッキングです。

エレミヤ書の最後の章（34：18, 19）を参考にして考えると、古い原始的な契約の儀式としては、契約を結ぶ両者がこの「向かい合わせた」犠牲獣の死骸の間を歩いたものです。「ユダとエルサレムの……民のすべてが二つに切り裂いた子牛の間を通った」と、エレミヤも書いております。この儀式——「誓いの歩行」の意味は、「私がもし契約の努めを果しませんでしたら、この犠牲と同じになっても宜しくございます」というゼスチュアでした。ところが……です。アブラハムの側でその「誓いの歩行」を全くしないのに、暗闇の中で何かが一方的に起こるのです。

17. 日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。 18. その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、 19. カイン人、ケナズ人、カドモニ人、 20. ヘト人、ペリジ人、レファイム人、 21. アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人の土地を与える。」

以前、この場面をテキストに、「主の裁量に服する」という題で発表したことがあります。ふつう「契約」とか“covenant”と訳されるヘブライ語の「ベリート」בְּרִיתは、むしろ、「裁量」と訳するのが適切であろうと申しま

した。特に、このベリートを $\delta\iota\alpha\theta\eta\kappa\eta$ と訳した LXX やヘブライ書の見方(第18講参照)はそうだと思います。ちなみに「契約を**結ぶ**」はヘブライ語では、「ベリートを**切る**」です。

とすると、「主がアブラハムと**契約を結んだ**」と訳すよりはむしろ、「主は御自分の裁量をアブラハムに宣言した」の方が適訳でしょうし、「アブラハムは主と契約を結んだ」と言うよりは、「アブラハムはその**主の裁量に服した**」の方が、「ベリート」の本質を正確に表わせると思います。使徒パウロの受け止め方をヒントに現代の語学者や神学者が長い時間をかけて気づいた意味が、すでにこの「炉と松明」の場に暗示されているのは大きな驚きです。私たちは当然アブラハムがその裂かれた犠牲獣の間を歩くことを予想するのに、「突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた」のです。アブラハムはただ恐れに呑まれたまま、「あれよ、あれよ」と見守るだけだったでしょう。

主は「この土地を、あなたの子孫に与える」と言われたのですが、そのアブラハムは現実に、それを信じられるような状態に果してあったのか……。私たちは物語の冒頭に戻らねばなりません。

1. これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。

「恐れるな、アブラムよ。

わたしはあなたの盾である。

あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

2. アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」 3. アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださりませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっていません。」

4. 見よ、主の言葉があった。

「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

5. 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

6. アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

最後の行は、パウロがローマ書の中で二回（4：3, 9, 22, 23）、ガラテヤ書で一回（3：6）引用して、「信仰とはこれだ！」という見本に掲げています。ヤコブもまた、「生きて働く本物の信仰とは……」というところで、この創世記（15：6）を引用していますから、使徒たちがこのアブラハムの信仰をどれだけ大事に、真剣に受け止めていたかが伺い知れます。

ローマ書が引用しているのは、パウロが子供の頃から会堂で教えられたギリシャ語訳（LXX）の創世記です。日本語では、「アブラムは主を信じた」ですし、英語でも“Abraam believed God.”と訳すのですが、原文は《ἐπίστευσεν δὲ Ἀβραὰμ τῷ θεῷ.》で、「神のおっしゃった内容を本気で額面どおり信用した」という響きの文章です。アブラハムがこの時に急に神を信じる気になったと言うのじゃなく、それだけ無条件に、「この神が約束なさった以上、絶対間違いはない。私は信じて待つ」という全面的な信頼が、ここでは表現されているのです。

3 節では「神様、このままでは何を頂きましても、アブラハムの血筋が絶えた後になります」と不安を言い表したアブラハムですが、「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」という、主の一言でアブラハムは、本来の絶対信頼の立場に戻ります。ここの主のお言葉自体は何の証明にも保証にもなっていないのですけれど、神様が「ほら、私がいるぞ。忘れたか」とでもおっしゃるように「恐れるな。報いを与えるのは私だぞ。あなたの子孫はこの星のようになることを

忘れるな」とおっしゃった途端、自分を見て絶望していたアブラハムが、生ける神に目を上げるのです。もう少しで、「もう何も変わりはない。ずっとこのまま絶望だ」と決めかけていた彼が、そのお言葉を受けた瞬間に、「いや、この絶望は錯覚だ。主なる神が言われたことの方が確かだ！」に変わるのです。

その飛躍を起こしたものは何だったのか……私たちとしては、それを知りたいのですけれど、ヒントは何もありません。……空の星だって、何の証拠にもならないのです。ただ、「確かに、生ける神がこの私を覚えて、しっかり捕まえていて下さる。神が断言して保証なさる。神が『恐れるな』とおっしゃる。」それだけでアブラムの信頼は戻った……としか説明のしようがありません。神御自身が奇跡を起こして、この告白を呼び出したのだと言い換えましょうか。

前回に申しましたように、ここではサラの不妊が、信仰を打ち砕く絶望のシンボルとして使われています。そして、この時点までの神様との生きた歴史だけが、アブラハムにとって、「なぜ信頼できるか」の唯一の根拠なのです。「私を知っているだろう」と言われるかのようです——神は。……続きを読みます。

7. 主は言われた。

「わたしはあなたをカルデアのウルから導き出した主である。わたしはあなたにこの土地を与え、それを継がせる。」

8. アブラムは尋ねた。

「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によって知ることができましょうか。」

この8節の問いを、アブラハムの不信と反抗の現れと見るのは Brueggemann、これに対し、「信じます。信仰のないわたしをお助けください」（マ

ル9:24)と同じ真摯な心、すがりつく者の告白だと取るのは Kidner です。最後に12から16までを朗読いたしますが、12節の「深い眠り」という言葉は、主がアダムからエバを創る場面(2:21)にも出てくるのですが、この「タルデマー」תַרְדֵּמָה の語根は、「意識を失う」意味の נָרַח ですから、ギリシャ語訳 LXX は、アブラハムが“熟睡”したようには訳さず、「エクスタシーがアブラムの上に落ちた」《 ἔκστασις ἐπέπεσεν 》としています。以前ここを読んだ時には、それがよく分からなかったので、アブラハムは一回熟睡した後に「寝起き」の不確かな眼で炉と松明を見たのかな……とったり、寝入ったまま夢で見たのか……と不思議に思ったものでしたが、タルデマーが熟睡じゃなくて脱自(恍惚)状態であったとすると、彼は、イザヤやエレミヤやエゼキエルと似たような形で、あるいは、黙示録の著者が「霊に捕らえられ」《 ἐν πνεύματι 》たのと同じような状態で、この後の言葉と幻を頂いたこととなります。

12. 日が沈みかけたころ、アブラムは深い眠りに襲われた。すると、恐ろしい大なる暗黒が彼に臨んだ。 13. 主はアブラムに言われた。

「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。 14. しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。 15. あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。 16. ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである。」

17. 日が沈み、暗闇に覆われたころ、突然、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎた。 18. その日、主はアブラムと契約を結んで言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。エジプトの川から大河ユーフラテスに至るまで、

「四百年の間奴隷として仕え、苦しめられる」(13)は、もちろん、エジ

プトでのイスラエルの経験、「脱出」は出エジプトです。「四代目」は、代
 変わりの時点で計算すれば数十年ですが、古代イスラエル文学の手法では人
 一人の寿命を約百年とみています。ここは「四代目」と言うより、「四人の
 寿命を経てここに戻る」の方が、וְדָוִד רָבִיעִי יָשׁוּבוּ הֵנָּה の訳としては近いと
 思います。ここでは、「四百年」と「四寿命」は全く同じ意味の対句と見て
 宜しいでしょう。つまり、ヤコブの息子が何才の時に長男を生んで、その長
 男が何才の時に彼が死んで、後を継いだ者がそれから何年生きてその後……
 という複雑な計算じゃなく、ここは素朴な表現として、「寄留の期間は四百
 年——人の命で言えば、ちょうど四代だ」と読むのが、自然な文学の読み方
 ではないかと思えます。正確な年数でしたら、出エジプト記 12:40 は、「イ
 スラエルの人々がエジプトに住んでいた期間は四百三十年であった」と記し
 ます。ところで、この 8 行の重点はいったい、どこにあるのでしょうか？

「待つ」ということは、**信頼があって初めて可能なことです**。3 節のアブ
 ラハムは、「もう待てません」とは言っておりませんが、「これでも、
 まだ待てとおっしゃるのですか？」という感じに聞こえます。4 節のお言葉
 は、「あなた自身の子がこの地を継ぐのだ」という保証ですけれど、13 節は、
 「実際には、これから、四人の寿命をつないだ年数だけ実現は遅れるが、待
 てるか……」です。

16 節の最後のお言葉、「アモリ人の罪が極みに達しないからだ」の意味は、
 「やがて私がアモリ人を裁く時が来る。四人の寿命を足しただけの未来に、
 私はお前の子孫がエジプトから荒れ野を通してこの地に入るのを見ているが、
 お前も私と同じだけの射程でその場面が見えるか。見えなくても、**私が見て
 いるというだけで信頼して待つことができるか**」です。主は、アブラハムに
 それができる、と判断なさった。そして、アブラハムは主の御期待どおり、
 できたのです。

私たちには、「とてもこれ以上は待てない」と思えることが、いくつも訪

れます。そこで「時間ぎれ」になって、去る人もいます。そんなの、待てる訳はないからです。「騙された」と神を呪う人だっています。しかし、正にそこで、神のチャレンジと御期待に答えて、「はい、信じます。私にとってあなたは、そんな確かな神でいらっしゃる」と告白する人もいます。それを言わせるものは、俗な言い方言えば、生ける神との、一生かけた長い“付き合い”です。もっと聖書的な表現で言えば、「エノクは神と共に歩いた」（創5:23）という、あれです。エノクと同じ記録は作れないでしょう。あれは千代の富士や大鵬の記録とは次元も桁も違います。でも、できれば、エノクの七分の一でも、八分の一でも、恵みによって歩かせて頂きたい……と。これは、前回と同じ結論になりました。

「アブラハムは神が言われた以上間違いはないと、本気で受け止めた。そのことを（外には何ひとつ彼の義はなかったけれども）彼の義として、主は評価なさった。」このアブラハムという所に自分の名を入れて、読み替えたいと思います。

(1994/02/13)

《研究者のための注》

1. 「契約」と訳されている בְּרִית の意味は、むしろ、「裁量」と訳した方がより正確に表現されるのではないかという私見は、「ヘブライ書の福音」第16～20講で発表してあります。この点についてはまた「ルカによる福音」第88講、「ガラテヤ書の福音」第11講、それに、1988年6月大阪聖書学院での同じ創世記15章に基づく発表「主の裁量に服する」を参照して下さい。特にルカ88講で触れた《Εἶμαι στή διάθεσί σου.》という現代ギリシャ語の慣用句は、Behm が Kittel 辞典で(英訳 125 頁)指摘する、「διαθήκη と διάθεσις との密接なつながり」を裏書きして、私には興味深く思えます。
2. ガラ3:20にある《ὁ δὲ θεὸς εἷς ἐστιν.》を新共同訳が「神はひとりで事を運ばれたのです」と大胆に意識しているのは適切だと思います。ガラテヤ書は神とアブラハムとの διαθήκη という言い方をせず、アブラハムへの「恵み」あるいは「約束」と呼ぶのですが、明らかに15,17節はこれを、アブラハムへの神の《διαθήκη》と見て論

不思議な“契約”

じています。とすると、パウロもこの時の **בְּרִית** を「仲介者の入る余地のあるような二者間の双務契約ではなく、神がひとりで事を運ばれて成立したふしぎな契約」であるという見方をしていることとなります。